

志賀直哉 『映山紅』 所収作品の本文

——「真鶴」他四編の最終稿を求めて——

寺 杣 雅 人

安 達 智 美 熊 渕 沙 耶

新 宅 綾 南 堀 明 希

はじめに

志賀直哉「城の崎にて」の最終稿は、昭和二十一年刊の『映山紅』（全国書房）所収「城崎にて」であることが最近行った調査¹⁾で明らかとなった。

またこの調査で、最新の『志賀直哉全集』第三卷（平成十一年、岩波書店）に収録された「城の崎にて」のすべの字句が、昭和十三年刊行の『志賀直哉全集』（改造社、以下「九巻本全集」とする。）第三卷所収の「城の崎にて」と一致していることも判明した。すなわち、平成十一年刊行の現行全集所収「城の崎にて」の本文は、昭和十三年時点のいわば途中形であった。

この昭和十三年刊の九巻本全集所収「城の崎にて」に対して、標題の表記を「城の崎にて」から「城崎にて」と改め、段落分けで六箇所、語句では「山女」（やまめ）を「鮎」（はや）とするなど二十箇所を超える修訂を加えて成ったのが昭和十五年刊の『映山紅』（草木屋出版部）所収「城崎にて」で、さらにその段落分けを見直して最後に点晴をほどこしたのが、はじめにあげた昭和二十一年刊の『映山紅』（全国書房）所収「城崎にて」であった。（以下、二つの『映山紅』については、昭和十五年刊のものを『映山紅』A、昭和二十一年刊のものを『映山紅』Bと呼ぶこととする。）

大正六年五月の『白樺』に初出した志賀直哉の名編「城の崎にて」は、実に二十九年の彫心鏤骨をへて「城崎に

て」という知られざる最終形に到達していたのであった。

ところで、昭和十五年と昭和二十一年の二度刊行された『映山紅』のいずれにも、「城崎にて」以外に、「真鶴」、「百舌」、「雪の日」、「山科の記憶」、「菰野」という五つの志賀直哉作品が収録されている。『映山紅』B所収「城崎にて」が「城の崎にて」の最終稿であるならば、これら五作品の最終稿も現行全集収録本文ではなく、『映山紅』B所収の本文である可能性があり、それはこの〈小説の神様〉の本文形成のあり方を知るためにも是非確かめておきたい。

本稿は、『映山紅』所収六作品中の五作品、「真鶴」、「百舌」、「雪の日」、「山科の記憶」、「菰野」について、それぞれの初出から平成十一年刊の『志賀直哉全集』（岩波書店、以下現行全集とする）。所収本文までの本文の動きを追跡し、著者が最終的に関与した本文はいずれであるかを見定めようとするものである。

一 本文校異の手順

『映山紅』所収の五作品について、それらの本文の変遷を次に示す『映山紅』Aおよび『映山紅』Bをはじめとする1～6の六つの定点において捕捉する（以下、本文

の名称として1～6の番号を用いることがある）。

1 各作品初出本文

「真鶴」（『中央公論』、大正9年9月）

「百舌」（『不二』、大正15年1月）

「雪の日」（初出時の標題は「日記帖」、「讀賣新聞」、

大正9年2月23日～26日）

「山科の記憶」（『改造』、大正15年1月）

「菰野」（『改造』、昭和9年4月）

2 各作品単行本初収本文

「真鶴」（『荒網』、大正10年2月）

「百舌」（『山科の記憶』、昭和2年5月）

「雪の日」（『荒網』、大正10年2月）

「山科の記憶」（『山科の記憶』、昭和2年5月）

「菰野」（『萬曆赤繪』、昭和11年11月）

以下は、五作品すべて同じ全集や単行本に収録されたそれぞれの本文となる。

3 『志賀直哉全集』第三・四・五巻（九巻本全集、改造社、

昭和12年12月～昭和13年4月）所収各作品本文

4 『映山紅』（草木屋出版部、昭和15年12月）所収各

作品本文

5 『映山紅』（全国書房、昭和21年12月）所収各作品
本文

6 『志賀直哉全集』第三・五・六巻（岩波書店、平成11年
2月～5月）所収各作品本文

1 はそれぞれの初出本文、**2** はそれぞれの単行本初取
本文であり、**1**と**2**の間で刊行された本文は存在しない。
そのため、どの作品においても**2**の底本は**1**となる。た
とえば、「真鶴」の場合、**1**の『中央公論』（大正9年9月）
初出本文が**2**の単行本（『荒絹』、大正10年2月）初取本文の
底本となっている。

しかし、**2**の単行本初取本文と**3**の『志賀直哉全集』（九
巻本全集）所収本文との間には、最小で一年半、最大で
十七年の隔たりがあり、**2**と**3**以外の別の本文が存在す
ることがある。最小の「菰野」には**2**と**3**の間で刊行さ
れた本文はないが、最大の「真鶴」では、『寿々』（改造社、
大正11年4月）所収本文をはじめとする八本文が刊行され
ている。したがって、**3**の本文に**2**との間の異同が見え
たととしても、それは**3**において発生したものではなく、
2と**3**の間で刊行された別の本文で発生した異同が**3**に
まで受け継がれた結果であることもある。

3～**6**についても刊行された本文を完全に網羅してい
るわけではない。本稿における調査は、あくまでも五作

品の本文の流れを対象とする定点観測である。

ただし、当該五作品の本文の形成において、『映山紅』
所収本文がどのような位置にあるかを知るにあたって
は、それでなんの不足もないであろう。**1**の初出本文と
2の単行本初取本文、そして特に**3**の九巻本全集、**4**の
『映山紅』A、**5**の『映山紅』B、**6**の現行全集に収録
されたそれぞれの本文間にどのような異同があるかを見
れば、それは容易に知ることができるはずである。

校異の対象は、「段落」、「文」および「語句」とする。
漢字の新旧および漢字・かなの使い分け、傍点やふり
がなの有無などの表記は、校異の対象としない。これら
については著者の生じさせたものではないかもしれないが、
著者の本文形成の実際を明らかにし、各作品の最終稿を
求めるためにはかえって混乱をきたす恐れがある。

読点についても、著者の文学表現の有りようを全体的
に掌握するには不可欠であろうが、今回は校異の対象と
しない。五作品の本文がどのように変遷したかを取り急
ぎ突きとめたいからである。

校異結果は、異同の有無を本文番号によってあらわす。
この方法は、平成十年四月の「横光利一『蠅』の成立」
での試みを嚆矢とするが、多数の本文を対象としてその
異同の全体を鳥瞰することができ、本文の先後関係を客
観的、計量的に理解するにはとくに有用である。

本文の番号は、先に示した**1**から**6**を使用する。

本文番号を用いた校異表の作成方法は次の通りである。

イ、**1**～**6**に掲載・収録された本文を刊行順に関して

いく。異同のある本文に行き当たったとき、校異表の該当箇所はその本文の番号を○で囲んで記入し、異同の発生点を明示する。異同のある字句等は同じ列の下に設けた「異同の内容」に示す。

ロ、「異同の内容」に異同のある字句等を記入する際、それに対応する初出本文の字句等を**1**の欄に記入し、校異表の最上欄に通し番号を書き入れる。

ハ、**1**に字句等のある**2**～**6**の本文で、**1**と同じ字句等をもつ場合は、該当箇所に**1**を記入する。異同が発生した本文と同じ字句等をもつ場合は、異同の発生した本文の番号をそのまま(○で囲まない形で)該当箇所に記入する。(これで初出本文を起点として異同箇所の推移をすべて捕捉でき、初出本文**1**があれば、**2**～**6**のすべての本文をこの校異表から再現することも可能となる。)

ニ、「頁・行」は、**1**の初出本文における当該字句等の位置を示す。ただし、「雪の日」の初出本文(標題「日記帖」は新聞紙上に掲載されたもので「頁・行」

で表すことが困難であるため、**2**の単行本(『山科の記憶』)所収本文の「頁・行」を記入することとする。

二 段落の異同

まず「真鶴」から『映山紅』の目次の順に段落の異同を見ていく。(五作品の本文校異は、段落・文・語句とも、「百舌」を熊淵、「雪の日」を安達、「山科の記憶」を新宅、「菰野」を南堀が担当し、「真鶴」は四名全員で担当した。)

「真鶴」

No.	頁・行		異同の内容
1	頁・行	1	
155・10	(改行)彼は嘗て	2	
1	1	3	
③	③	4	
3	3	5	
3	3	6	
			彼は嘗て

「百舌」

No.	頁・行		異同の内容
2	頁・行	1	
7・3・4	(改行)蛇は	2	
7・2	(改行)そして翌日	3	
1	1	4	
④	④	5	
4	4	6	
1	4		蛇は
			そして翌日

「雪の日」

No.	頁・行		異同の内容
2	頁・行	1	
136133・3	(改行)そして	2	
③	③	3	
3	3	4	
3	1	5	
3	3	6	
			(改行)そして
			(なし)

「山科の記憶」

No.	頁・行	No.	頁・行
2	1	1	1
332・5	325・1		
「改行」此素画集の		これは既に過去の記憶だ、自分を彼と書くのが適はし。	
1	②	2	2
③	2	3	2
3	2	4	2
1	2	5	2
3	2	6	2
「改行」彼は		(なし)	
		異同の内容	

「菰野」

No.	頁・行	No.	頁・行
1	192・12	1	2
女中は		1	3
		④	4
		4	5
		1	6
「改行」女中は		異同の内容	

3〜6の本文に注目すると、段落分けで動きがあるのは「百舌」の2箇所(通し番号1・2)、「雪の日」の1箇所(同1)、「山科の記憶」の1箇所(同2)、「菰野」の1箇所(同1)である。

「百舌」では、2箇所とも4の本文で改行がなくなっていて、それを5の本文が受け入れている。だが、6の本文ではそれを受け入れたもの(通し番号1)と受け入れられないもの(同2)に分かれている。

早くもここで「城の崎にて」とは異なる本文の関係図が浮かび上がった。しかも、「城の崎にて」と違って『映山紅』で発生した異同を受け入れているばかりでなく、『映山紅』での異同を受け入れず、遡って改行の消えた3に拠るといふ「城の崎にて」と同じ面も合わせ持っている。「百舌」では、6の本文の形成に九巻本全

集と『映山紅』という二種の本文が関わったと見られる。

「雪の日」では、3において「そして」での改行が発生し、それが4に受け継がれているが、5では元に戻って「そして」での改行がなくなっている。6の現行全集の本文に3とあるのは、3の九巻本に拠ったか4の『映山紅』Aに拠ったかのいずれかであろう。

「山科の記憶」における「彼は」での改行も3の本文で発生しており、その後の動きも「雪の日」の「そして」に等しい。ここでも現行全集の本文は、3か4のいずれかに拠っているのであるが、これだけではどちらともいえない。

最後に「菰野」であるが、4で発生した「女中は」での改行は5に受け入れられているが、6には受け入れられていない。現行全集の本文は、この部分に関しては、3の九巻本全集に拠ったものと思われる。

三文の異同

次は文の増減を見たものである。

「真鶴」

No.	1	2	3	4	5	6
頁・行	153・3	153・5	153・5	153・11	156・14	156・5
1	それに睡むくもなつて居た。	「改行」此素画集の然し兄の方はそんな事には気づかなかつた。彼は独り物思ひに沈んで居る。	彼には此氣持ちが何んであるかよく解かつて居た。	お前に此歌の意味が解かるかね」とかう云つた。かう云つて教員は笑ひながら女教員の顔を横から覗き込んだ。	彼は今更に弟の疲れ切つた様子に気がつくと急に可哀想になつた。	
2	②	②	②	1	1	②
3	2	2	2	1	③	2
4	2	2	2	④	3	2
5	2	2	2	1	3	2
6	2	2	2	1	3	2
異同の内容	(なし)	然し兄の方は独り物思ひに沈んで居る。	(なし)	お前に此歌の意味が解かるかね」とかう云つて教員は笑ひながら女教員の顔を横から覗き込んだ。	彼は今更に弟の疲れ切つた様子に気がつくと急に可哀想になつた。	(なし)

「百舌」

No.	1	2	3	4	5	6
頁・行	3・3	4・4	4・4	5・13	5・15	6・10
1	折つて、「どうだ。これでいゝか」と渡してやった。	左うでも、ありませんよ。	出来上つて見なければ分らないが、何方かといへば呑気な絵ね	「第一お兄さんの柄ですわ」	「ひどい事を云ひやがる」	百舌を持つて来い。此所へ持つて来い
2	②	1	②	②	1	②
3	2	1	2	2	③	2
4	④	④	2	④	2	④
5	4	4	2	4	2	4
6	4	4	2	4	2	4
異同の内容	②折つた。「どうだ。これでいゝか」④折つて渡した。	(なし)	②然し何方かといへば呑気な絵ね。③でも、いゝ事よ。面白い所があつてよ	②「第一、柄ですわ。お兄さんに馴れるなんて、百舌位なものよ」④お兄さんに馴れるなんて、百舌位なものよ	(なし)	百舌を持つて来い
						(なし)
						(なし)
						④強い啼声を聴き、
						(なし)
						(なし)
						両方に一本づゝ足の出てゐる胴なかには柳堂も閉口した。

1	No.
198・6	頁・行
「どっでした」 結末までの18文	1
②	2
2	3
2	4
2	5
2	6
(なし)	異同の内容

「菰野」

1	No.
325・5	頁・行
これは既に過去の記憶だ。自分を彼と書くのが適はしい。愛する女の事を別かれて考へるのは快樂だ。二重の快樂だが、家が近づき、妻に偽りを云はねばならぬといふ予想が起ると、それが暗い当惑となつて彼におほひ被さつて来た。	1
1	②
1	2
④	2
4	2
1	2
(なし)	異同の内容

「山科の記憶」

1	No.
136・3	頁・行
此素画集の出版が全ての点で「行く事」を自分達に望んで居る。	1
1	2
③	3
3	4
3	5
3	6
(なし)	異同の内容

「雪の日」

3〜6の本文で文に増減があるのは、「真鶴」の1箇所(通し番号4)、「百舌」の6箇所(同1・2・4・7・8・9)、「山科の記憶」の1箇所(同2)である。「真鶴」では、2文が1文にまとめられるという異同が4の本文で発生し、それが5の本文に受け継がれているが、現行全集本文はその大きな修訂を受け入れていず、3以前の1文に戻した格好である。「城の崎にて」と同じく、3の本文を写したものであろうか。

「百舌」における6箇所の異同は、4〜6での本文ですべて「④44」とあり、明らかに4の『映山紅』Aで新出した異同を承けている。ただし、ここではまた6の現行全集本文は4の『映山紅』Aに拠ったものか5の『映山紅』Bに拠ったものか、いずれかではあるが、どちらとも判断できない。

「山科の記憶」の1箇所は、4において2文を1文にまとめているが、3〜6では、「1④41」、すなわち2文・1文・1文・2文という関係にある。現行全集の6が2文であるのは3に拠ったのであろう。

四 語句の異同

最後に五作品の語句の異同を見てみよう。

「真鶴」

No.	頁・行	1	2	3	4	5	6	異同の内容
153	153・3	海岸の道を	1	③	3	3	3	海岸の高い道を
2	153・3	歩いて来た。	1	③	3	3	3	歩いてゐた。
3	153・6	恋と云ふ言葉は	1	③	3	3	3	恋と云ふ言葉を
4	153・9	行く後を	1	③	3	3	3	行く後から
5	154・1	云つたやうな気も	1	③	3	3	3	云つたやうな気が
6	154・3	彼は	1	③	3	3	3	(なし)
7	154・6	兜巾の如くに	1	③	3	3	3	兜巾のやうに
8	154・7	ゴムで	1	③	3	3	3	ゴム紐で
9	154・14	此叔父が	②	2	2	2	2	叔父が
10	154・14	乗せて居るやうな	1	③	3	3	3	乗せたやうな
11	154・15	これ以外の	②	2	2	2	2	これ以外に
12	154・15	此叔父を	②	2	2	2	2	叔父を
13	154・16	彼の水兵熱を	1	④	4	4	4	其の水兵熱を
14	155・1	従いて来た弟も	②	2	2	2	2	従いて来た弟が
15	155・1	怒る事かと	1	④	4	4	4	怒るか
16	155・3	そんな事も	1	④	4	4	4	そんな事を
17	155・5	妻らしい	1	③	3	3	3	女房らしい
18	155・10	これ程に	1	③	3	3	3	これ程

155	155・10	美しい	1	③	3	3	3	美しい、これ程に 色の白い
20	155・12	入つた時にも	②	2	2	2	2	入つた時には
21	155・16	波の音と	1	④	4	4	4	波の音を
22	156・2	両膝を開いて、	②	2	2	2	2	両膝を開き、
23	156・3	所はげた	②	2	2	2	2	所はげな
24	156・3	それらを	1	③	3	3	3	それを
25	156・5	夕もやの中に	②	2	2	2	2	夕もやの中へ
26	156・7	彼の飯屋の前に	②	2	2	2	2	彼が飯屋の前に
27	156・7	立ち尽して居る	②	2	2	2	2	立ち尽して居た
28	156・8	代りく	1	③	3	3	3	代るく
29	156・12	彼の横顔を	1	③	3	3	3	二人の横顔を
30	156・15	何んだか	1	③	3	3	3	(なし)
31	157・2	自分が	1	③	3	3	3	(なし)
32	157・3	弟の前へ	1	③	3	3	3	弟の前に
33	157・4	つぶつて了つた。	②	2	2	2	2	つぶつた。
34	157・5	「寒くないか」	1	③	3	3	3	「寒くないか?」
35	157・10	気がしたのである。	②	2	2	2	2	気がして居た。
36	157・13	兎も角	1	③	3	3	3	兎に角
37	157・15	(なし)	②	2	2	2	2	彼等の
38	157・16	迎えに来た	②	2	2	2	2	迎ひに来た
39	157・16	彼等の母親で	②	2	2	2	2	母親で
40	158・1	圧へくして	1	③	3	3	3	圧へくして
41	158・4	惜しく	②	2	2	2	2	惜しく

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
3・12	3・5	3・4	3・4	2・12	2・7	2・6	2・1	1・7	1・6	1・6	1・6	1・6	1・5	1・4	1・4	1・4	1・2	1・2	頁・行
お礼	蛇といふ奴は	却々	解くぞ	首へ	小さな	女の小指程の太さの	泥だらけの手	手を借らず、	庭の手入れは植え込み以外	引越してから	此沼べりへ	彼は	感じられた	非常に	彼には	今年	背中に	ぼかく朝との陽を	1
1	1	1	1	1	1	②	1	②	②	②	1	②	1	②	②	②	1	②	2
1	1	1	③	③	1	2	1	2	2	2	1	2	③	2	2	2	1	2	3
④	④	④	④	1	1	④	④	2	④	2	④	2	3	1	2	2	④	④	4
4	4	4	3	3	4	4	4	2	2	2	1	2	3	2	2	2	4	4	5
4	4	4	3	3	4	4	4	2	2	2	1	2	3	2	2	2	4	4	6
礼	(なし)	(なし)	解く	首に	(なし)	②太さで④小指よりも細い	泥の手	手を借らずに	②彼は植込み以外庭の手入れを④彼は植込み以外は庭の手入れを	引越して以来	此沼べりに	(なし)	感ぜられた	非常な	(なし)	今年	背に	④朝の陽を	異同の内容

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	
5・4	5・4	4・16	4・16	4・16	4・16	4・14	4・13	4・12	4・9	4・5		4・4	3・14	3・12	
入れてやつた。	飼つた事があり	余り	如何にも	切りに	不安さうな	現はれて来た	その	切り崩した崖の途中に実生の三年程経つた	んだ	これが一番ましな	呑気でも差支えないが	出来上つて見なければ分らないが、何方かといへば呑気な絵ね	「どうだ、これは」	或る絵の会の若い画家が取りに来る筈の絵だつた。	入つた時にも
1	1	1	1	1	1	1	1	1	②	②		②	1	1	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2		2	1	1	
④	④	④	④	④	④	④	④	④	2	2		④	④	④	
4	4	4	4	4	4	4	4	4	2	2		4	4	4	
4	4	4	4	4	4	4	4	4	2	2		4	4	4	
入れた。	飼つた	(なし)	(なし)	(なし)	不安な	現れた。	(なし)	雌に実生の	ましな方だ	(なし)	あつてよ	②然し何方かといへば呑気な絵ね。でも、い、事よ。面白い所があつてよ④何方かと云へば暢気な絵ね。でも、いい所があつてよ	「どうだ、これは」	或る画会に渡す絵だつた。	行つた

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
8・3	7・15	7・11	7・11	7・8	7・8	7・3	7・2	7・2	7・2	7・2	6・14	6・13	6・12	6・12	6・11	6・10	6・3	5・16	5・13
かうして	するなどでも	了つてある	何んだか、	お種を呼んだ	「お種、お種」	そして	聴いた。	戸外でしてゐるのを	強い啼声が	親百舌らしい	少しもこわがらずに	コラ馬鹿々々	小さな	それを見つけて、	持つた柳堂が	此所へ持つて来い。	合間、	悪い癖	「第一お兄さんの柄ですわ」
1	1	②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	②	②	1	1	②
1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	2
④	④	2	④	④	④	④	④	④	④	1	④	④	④	④	④	④	④	④	④
1	4	1	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	4	1	4	4	4	4	4	4	4	⑥	4	4	4	4	4	4	4	4	4
(なし)	するなど	了つてある	(なし)	呼んだ	「お種」	(なし)	聴き、	(なし)	強い啼声を	百舌の	(なし)	馬鹿々々	(なし)	見て、	②持つて柳堂が④持つて行く	②此所へ百舌を持つて来い④百舌を持つて来い	合間	癖	②「第一、柄ですわ。お兄さんに馴れるなんて、舌位なものよ」④お兄さんに馴れるなんて、百舌位なものよ」

6	5	4	3	2	1	No.
126・10	126・10	126・7	126・7	126・1	125・1	頁・行
子供の	三十八日目に	普段は	一種の	涙だらけの	行くべき	1
②	②	②	②	1	②	2
2	2	2	2	③	2	3
2	2	2	2	3	2	4
2	2	2	2	3	2	5
2	2	2	2	3	2	6
直康の	三十七日目に	その普段	(なし)	涙に濡れた	行く筈だった	異同の内容

「雪の日」

67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55
8・15	8・15	8・14	8・14	8・14	8・13	8・13	8・12	8・9	8・9	8・4	8・4	8・4
先へ行きして	又来ると	甚く	とまると	堪えないやうな	そして	なつて	ある	笠のやうに作つて	云ふ	もう	榎の枝にかけつば	少し位雨の日でも、
1	1	1	1	②	1	1	②	②	②	1	1	1
1	③	1	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1
④	3	④	④	④	④	④	④	2	④	④	④	④
4	3	4	4	2	4	1	4	2	4	4	4	1
4	3	4	4	2	4	1	2	2	4	4	4	1
先へ行き	来ると	(なし)	とまり	②堪へられないやうな	④堪えられない	(なし)	しかも	②笠のやうな④(なし)	(なし)	云つた。	枝にかけばなしに	雨の日も、

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
131 ・ 7	131 ・ 3	131 ・ 1	130 ・ 9	130 ・ 9	130 ・ 7	130 ・ 6	130 ・ 1	129 ・ 12	129 ・ 9	129 ・ 9	129 ・ 8	129 ・ 8	129 ・ 5	129 ・ 3	128 ・ 12	128 ・ 8	128 ・ 4	127 ・ 11	127 ・ 4	127 ・ 1	126 ・ 12	126 ・ 12
柳が	今から	S氏に	輝かして	幸福さうに	時から	家を	どうしても	表現外に出て	本当に	船べりに	クッキリと	枯葎の	兎も角	K子さんが	K子さんが	来るの	婆アやが	軒下を	見て	自分は頼まれたの	(なし)	持った
1	②	1	②	1	②	1	1	1	1	②	1	②	1	1	1	②	1	1	②	②	②	②
③	2	1	2	③	2	③	1	1	1	2	1	2	③	1	1	2	1	③	2	2	2	2
3	2	④	2	3	2	3	④	④	④	2	④	2	3	④	④	2	④	3	2	2	2	2
3	2	4	2	3	2	3	4	4	1	2	4	2	1	4	4	2	4	3	2	2	2	2
3	2	1	2	3	2	3	1	1	1	2	1	2	3	1	1	2	1	3	2	2	2	2
柳は	(なし)	サッドラー氏に	照らして	(なし)	ときからは	自家を	(なし)	表現外に出てこ	(なし)	(なし)	くつきり	枯葎が	兎に角	兼子さんが	兼子さんが	来るか?	婆アやさんが	軒を	眺めて	自分に頼んだ	妻は	持つて居た

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
327 ・ 13	326 ・ 14	326 ・ 10	326 ・ 7	326 ・ 6	326 ・ 3	326 ・ 1	325 ・ 5	325 ・ 4	325 ・ 2	頁・行
仕方がなかつたのだ。	座敷の電燈を	感じてゐるのなら	中の灯を	欺いてゐる事が	それは一途に悪い意味には解されない。	稀有だといふ事が	考へた。	還えつて行つた。	月が高く、	1
②	②	1	1	1	1	②	1	②	1	2
2	2	1	1	1	③	2	1	2	1	3
2	2	④	④	④	3	2	④	2	④	4
2	2	1	4	4	3	2	4	2	4	5
2	2	1	1	1	3	2	4	2	4	6
仕方がなかつた。	座敷に電燈を	感じてゐるのだらうか。	内の灯を	裏切つてゐる事が	一途に悪くは解されない気がした。	この稀有だといふ事が	考へてゐた。	還へした。	月は高く、	異同の内容

「山科の記憶」

38	37	36	35	34	33	32	31	30
136 ・ 11	136 ・ 9	135 ・ 10	135 ・ 10	135 ・ 4	134 ・ 1	133 ・ 4	132 ・ 1	131 ・ 11
ランプで	又少時	一部の	素画集の	とうくく	ついて	K子さんや	兎も角	それなければ
②	1	1	1	1	②	1	1	1
2	1	1	1	③	2	1	③	③
2	④	④	④	3	2	④	3	3
2	4	4	4	3	2	4	3	3
2	1	1	1	3	2	1	3	3
ランプの光りで	少時	一部	雅邦素画集の	たうとう	ついて居る	兼子さんや	兎に角	それなければ

4	3	2	1	No.	
189・9	189・2	188・19	187・4	頁・行	
或る所で	加茂あたりで	あると思つた。	此夏も	1	
1	1	1	1	2	
③	③	1	1	3	
3	3	④	④	4	
3	3	4	4	5	
3	3	4	1	6	
(なし)	加茂あたりでは	あつた。	此夏	異同の内容	

「菰野」

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
332・5	332・3	331・15	331・4	330・17	330・14	330・14	330・12	329・10	329・5	329・3	328・15	328・13	328・12	328・12	327・14
一時的に	外れた事が	許可したのは	それは	O子さんも	考へてゐるから、	□Oさんの事を	O子さんも	Aの女が	心持を彼はよく掴めなかつた	彼は明瞭と憶ひ浮べる事が出来た。	彼では	不可能な事だつた。	知れぬ	れるも	そんなわけはない。呉
②	②	②	1	1	②	1	1	②	1	1	②	②	1	②	②
2	2	2	1	③	2	③	③	2	③	1	2	2	1	2	2
2	2	2	④	3	2	3	3	2	3	④	2	2	④	2	2
2	2	2	4	3	2	3	3	2	3	4	2	2	1	2	2
2	2	2	1	3	2	3	3	2	3	1	2	2	1	2	2
一時的にも	外れた事は	許したのは	それを	□Oさんも	考へてゐるから、	○○Oさんの事を	□Oさんも	Aといふ女が	心持はよく掴めなかつた	彼は憶ひ浮べる事が出来た。	彼には	不可能だつた。	知れない	呉れるかも	そんなわけはない。

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
197・18	197・18	197・17	197・17	197・17	197・17	197・17	197・17	197・13	197・3	196・13	196・11	195・18	195・3	194・5	193・8	193・7	193・3	192・19	192・4	192・3	189・18	189・11	189・11
私はそれを讀つて	(なし)	それには	(なし)	(なし)	(なし)	縮めて、	(なし)	それなのに	新館	新館	あつた	運命を	書かしてゐた。	或る程度に	訊ねたら	小鳥が	やうには	両方ともに	(なし)	(なし)	あかりが	ついた。	(なし)
②	②	②	②	②	②	②	②	1	②	②	1	1	1	1	1	②	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	③	2	2	1	③	③	1	③	1	2	1	③	③	③	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	1	3	3	1	3	1	④	3	3	3	3	④	④
2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	⑤	3	3	⑤	3	⑤	2	4	3	3	3	4	4
2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	1	3	3	5	3	1	2	1	3	3	3	4	4
(なし)	物哀れに	そこでは	殊に	しんみりした小説で	「街の女」といふ	縮めて、	自分が	それなのに	別館	別館	あいた	生涯を	書かしてゐる。	或る程度	訊いたら	鳥が	やうに	両方とも	と思つた。	悪事を業とする	ヘッドライトが	きた。	見てゐる

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
198 ・ 1	198 ・ 1	198 ・ 1	198 ・ 1	198 ・ 1	198 ・ 1	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 19	197 ・ 18	197 ・ 18	197 ・ 18	197 ・ 18	197 ・ 18
(なし) したとみえる。 (なし)	火葬された死骸の灰を 見た事はないのだが	(なし)	(なし)	どきりとした。	(なし)	灰の色に何か不吉な ものを感じた。	その白い灰を	(なし)	もう火は	残り、	(なし)	厚さに	灰が	(なし)	函にのせて	(なし)	(なし)	十九章へ	(なし)	(なし)
②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
免に角、 したのかも知れない。 (なし)	火葬の灰といふも いを見たことはな い	灰の色に何か不吉 なものを感じたら	自分でも驚いた。	どきりとして、	不図、	(なし)	葉巻の白い灰を	手にした	(なし)	残つたまゝ、	灰が	厚さに	(なし)	それは	函の上に	私は溜息をして、	一寸休んだ。	十九章に	私は	私は疲れた頭で読 みその気分につ 入れられた

まず「真鶴」では、語句の異同は全体で41箇所あるが、**3**～**6**の本文で動きの見えるのは、通し番号13・15・21の3箇所しかない。この3箇所はすべて**4**の本文で異同が新出したもので、右の校異表では、**3**～**6**は「1④41」と展開している。つまり、これら3箇所はすべて**6**の現行全集所収「真鶴」の本文が、**4**または**5**の『映山紅』ではなく、**3**の九巻本全集に拠っていることを表している。

「百舌」では、**3**～**6**の本文で語句に動きの見えるのは53箇所であるが、そのうちの51箇所が④を含んでおり、**4**で新出した異同である。この51箇所の内訳は、「1④44」と展開するものもつと多く38箇所、「2④44」が7箇所、「1④11」が4箇所、「2④22」と「2④42」が1箇所ずつとなっている。最後の「2④42」を除くと、**6**の現行全集所収「百舌」の本文は、すべて**4**または**5**の『映山紅』に拠っていることがわかる。さらにこのなかに4箇所ある「1④11」と1箇所の「2④22」は、**4**ではなく**5**に拠るものである。そ

52	51	50
198 ・ 3	198 ・ 3	198 ・ 2
と 思 つ た。	(なし)	不愉快な (なし)
②	②	②
2	2	2
2	2	2
2	2	2
2	2	2
(なし)	慢性的に	此不愉快な 此事件で

これから考えると、これら50箇所すべてに通じる現行全集所収の「百舌」の底本は、**5**の『映山紅』Bしかないということになる。

除いた1箇所「2④42」(通し番号61)だけは、**5**と**6**が一致していないが、それは**3**にあった「笠のやうな」という形容を**4**で脱落させ、それを承けてしまった**5**を**6**で訂正しているからである。³⁾

53箇所中の④を含まない2箇所は、通し番号44の「111⑥」と同52の「2211」であるが、前者の「111⑥」はそれまでの「親百舌らしい(強い啼き声)」を「百舌の(強い啼き声)」に修訂している。これは『映山紅』以降の本文に見える唯一の修訂である。後者の「2211」も④を含まないが、**6**は**5**と一致している。「百舌」の底本は、**5**の『映山紅』Bであると判断してよいであろう。

「雪の日」では、12箇所に**3**〜**6**の間での語句の異同が見られる。この12箇所は、すべて**4**での新出異同を含んでおり、しかもいずれも「1④41」と展開している。「城の崎にて」と同じく、**6**の本文は12箇所の『映山紅』にある異同箇所をいっさい受け入れていない。**6**の現行全集の「雪の日」は、**3**の九巻本全集所収「雪の日」に拠っていると考えられる。

「山科の記憶」には、**3**〜**6**の間に語句の異同が8箇

所見えるが、これらはすべて④を含んでいる。内訳は、「1④41」が4箇所、「1④11」が2箇所、「1④44」が2箇所である。4箇所ある「1④41」は、「城の崎にて」のように、また先に見た「真鶴」や「雪の日」と同じく、**6**の本文の拠り所が**4**や**5**の『映山紅』所収本文ではなく、**3**の本文であることを表している。ならば「1④11」の2箇所(通し番号8・13)についても、**6**における**1**は**5**ではなく**3**の本文に拠ったものと見るべきであろう。ところが、「1④44」の2箇所(通し番号1・3)では、**6**における**4**は明らかに**4**または**5**の『映山紅』における**4**を引いている。ということは、**6**の現行全集所収「山科の記憶」の本文は、九巻本の流れをくむ面と『映山紅』の流れをくむ面の両面を合わせもっているということになる。

最後の「菰野」であるが、ここにも8箇所に**3**〜**6**での語句の異同が見える。そのうち④を含む5箇所のなかには、「1④44」が3箇所、「1④41」が2箇所ある。残る3箇所は、⑤を含んでおり、「11⑤1」が2箇所、「11⑤5」が1箇所となっている。3箇所の「1④44」は**4**と**5**の『映山紅』の字句が**6**に伝わっているが、2箇所の「1④41」は逆に伝わっていないことを示している。「菰野」もまた「山科の記憶」と同様に、**4**または**5**の『映山紅』に拠った部分と『映山紅』を探

らず、**3**の九巻本全集に拠った部分が共存している。

また⑤を含む3箇所のうち、通し番号17の「あつた」(4)と「あいた」(5)は、単に「つ」を「い」とした誤りである。通し番号12の「小鳥が」(4)と「鳥が」(5)、通し番号14の「或る程度に」(4)と「或る程度」(5)も、5において文字の一部を脱落させた可能性もあるが、「或る程度」の方は6の本文に採られている。これは『映山紅』Bに拠ったことを表しており、先の「1④44」の3箇所も同様に6の4は、4ではなく5の4を承けているということになる。

ここで、これら五作品について、こうした語句の異同の新出とその推移の有りようを数値化し、全体を鳥瞰してみよう。

それぞれの本文で新出した異同箇所数は、同じ段の左端に□で囲んで記入している。「真鶴」で言えば、3の段の左端に22とあるが、これが3の九巻本全集所収の「真鶴」の本文で新出した語句の異同箇所数である。

この22を下にたどると、4で22、5でも22とあるが、これは3の九巻本全集所収の「真鶴」で発生した異同が、減少することなく、4の本文でも5の本文でもそのまま受け継がれていることを示している。

ただし、6に22とあるのは、「真鶴」の場合、6の本文は4や5を承けていないため、この22は3の22を写し

た結果に過ぎない。4での新出異同の3がまったく6の本文に受け入れられず、0となっていることがそれを表している。それは、「雪の日」でも同じで、4で新出した異同12は、5で11と1箇所を除いて受け継がれているが、6では0となり、まったく受け入れられていない。「真鶴」と「雪の日」からは『映山紅』との接点を見いだすことができない。これら二作品の本文は、3の九巻本全集に拠って形成されたと考えられる。

新出異同の推移

「真鶴」

				16	2
			22	14	3
		3	22	14	4
	0	3	22	14	5
0	0	0	22	14	6

				17	2
			9	17	3
		12	9	17	4
	0	11	8	17	5
0	0	0	9	17	6

「雪の日」

				20	2
			4	20	3
		51	4	10	4
	0	45	4	12	5
1	0	44	4	13	6

「百舌」

				38	2
			9	38	3
		5	9	38	4
	3	5	9	38	5
0	1	3	9	38	6

「孤野」

				13	2
			5	13	3
		8	5	13	4
	0	6	5	13	5
0	0	2	5	13	6

「山科の記憶」

これらの集計表は、本文の動きを定点観測して描いた本文異同の概略にすぎないが、初出本文を起点として後続の本文で次々に異同が生まれ、それが吟味されつつ継承されていく様子は、はつきりと見て取れるであろう。

(志賀直哉作品の本文は、こうして次第に完成形に近づいていき、最後に最終稿に到達することになる。文学作品において、刊行された本文は、初出本文を含め、すべてその時点での最終稿であり、見方によってはいずれを定本とするのも可であるうが、志賀直哉作品においては、この頂点をめざしての彫心鏤骨とその成果の蓄積からすれば、最終稿をこそ定本としたいところである。)

五 『映山紅』所収五作品の最終稿と系統図

『映山紅』所収五作品について、その本文の推移を調べた結果は、右の通りであった。

これに先だつて調査した「城の崎にて」は、『映山紅』B所収の「城崎にて」が最終稿であったが、今回調べた五作品中の二作品、「真鶴」と「雪の日」もやはり最終稿は現行全集所収本文ではなく、『映山紅』所収本文であった。実は、現行全集は昭和三十年刊の新書判全集を底本としており、新書判全集所収の「真鶴」と「雪の日」

の本文は、これらの九卷本全集所収本文を写したものであった。つまり、これら三全集の本文は、(菊判全集を加えれば四全集となるが)「真鶴」、「雪の日」に関して、そして「城の崎にて」に関しても、その字句を一字一句にいたるまで共有しているのである。

「真鶴」では、この最終稿において、1箇所⁸⁾で2文を1文にまとめた文の異同が新出しており、「波の音と」(聞かうと)を「波の音を」とする⁹⁾など3箇所¹⁰⁾で語句の異同が新出している。「雪の日」では、12箇所¹¹⁾の語句の異同が新出しているが、「K子さん」を「兼子さん」とし、「S氏」を「サツドラ氏」とするなどそのうちの4箇所(通し番号14・15・27・32)は記号化した人名を実名に直したものである。しかし、これらはいずれも現行全集所収本文には伝わっていない。

「城崎にて」に加え、「真鶴」と「雪の日」もその最終稿が現行全集に受け入れられていないのは残念であるが、これら二作品の知られざる最終稿の存在を確認できたことは今回の調査での収穫であった。

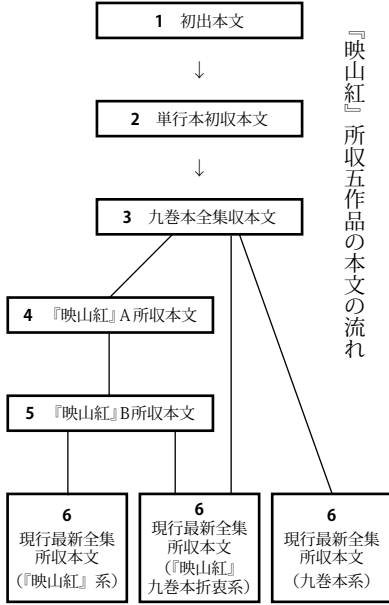
さて、述べてきた本文の流れを概観してみると、新書判全集編纂の際、「真鶴」をはじめとする五作品の底本としてそこに存在したのは、改造社版の九卷本全集と全国書房版『映山紅』Bであったと思われる。そうであれば、ここで底本として何を採るかは、三通りの可能性が

あったことになる。一つは九卷本全集であり、もう一つは『映山紅』Bであり、最後の一つは両者を折衷するという方法である。そして、結果として、これら三つの可能性はすべて実現されることとなった。

九卷本全集系は「真鶴」と「雪の日」である。兩作品の本文は、九卷本全集を写したもので、後に『映山紅』で新出する異同はいっさい受け入れていない。『映山紅』系は、文の異同をみても語句の異同をみても『映山紅』Bに拠っていることがはっきりしている。「百舌」である。そして「山科の記憶」と「菰野」では、『映山紅』のものと異同箇所は一部しか生かされていず、九卷本全集所収本文と『映山紅』Bとの折衷系といえるだろう。

図示すれば、次のようになる。

『映山紅』所収五作品の本文の流れ



おわりに

『映山紅』所収五作品、「真鶴」、「百舌」、「雪の日」、「山科の記憶」、「菰野」は、すべて昭和十五年刊の『映山紅』A(4)において、それぞれのそれ以前の本文との異同が新出していた。それは、段落、文、語句のそれぞれの校異表に④として表されている。

たとえば、「真鶴」は、段落で1箇所、文で3箇所。「百舌」は、段落で2箇所、文で6箇所、語句で51箇所。「雪の日」は、語句で12箇所。「山科の記憶」は、文で1箇所、語句で8箇所。「菰野」は、段落で1箇所、語句で5箇所というように五作品のすべてで新出異同を拾うことができる。

『映山紅』Aにおける段落、文、語句を合わせた異同箇所数は、それぞれで次のようになる。

	「真鶴」	「百舌」	「雪の日」	「山科の記憶」	「菰野」
	4	59	12	9	6

著者はこの『映山紅』Aにおいて本文の修訂を行っているのは明らかである。だが、見てきたように、なぜか五作品は、これらの異同が後の本文に伝えられたものとしてでないものに分かれる。換言すれば、新書判全集の

本文に生かされた作品と生かされなかった作品があるということである。「百舌」では生かされたが、「真鶴」や「雪の日」では生かされていない。

先に調べた「城崎にて」も、『映山紅』所収作品の一つであるが、やはり多くの、特に標題の表記に対してさえ合理的な修訂が施されている^⑩。だが、それが新書判全集にはまったく生かされていない。そのため、それを写した現行全集には当然伝わっていない。

なぜ『映山紅』で生まれた「百舌」の異同はすべて採られ、「城の崎にて」の異同はすべて捨てられたのであるのか。その取捨の判断を合理的に説明するのは難しい。

あるいは、単に選ぶべき底本を誤ったということもあるうし、新書判編纂の時点ならば、当然その底本の最も正統な選択肢として、先行する全集である九巻本全集が屹立していたという事情もあるう。また新書判全集の編纂に際して、全集とはいえ、二十年近く前に刊行された九巻本全集に比べても見劣りする、新書判の小ぶりでもない著作の編纂に、七十二歳になっていた著者が、底本の選定を含め、どれほど積極的に関わったのかという点も考慮すべきかもしれないが、本稿での考察はここまでする。

また、本稿では、『映山紅』での修訂から著者の本文形成の方法として何が帰納できるかについても、興味を

いだきながら十分な考察ができなかった。これらのことは今後の課題としたい。

注

(1) 寺杣「志賀直哉「城の崎にて」の形成——「城の崎にて」から「城崎にて」へ——」(『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号、平成23年3月)

(2) 漢字字体の新旧やルビの有無といった表記の違いを除けば、字句は完全に一致している。(1)に詳細を示している。

(3) 次の八本文が刊行されている。

『寿々』(改造社、大正11年4月)

『真鶴』(新しき村出版部、大正13年3月)

『志賀直哉集』(現代小説全集第八巻、新潮社、大正15年2月)

『志賀直哉集』(現代日本文学全集25、改造社、昭和3年7月)

『増補 夜の光』(新潮社、昭和4年2月)

『志賀直哉全集』(日本文学大全集5、改造社、昭和6年6月)

昭和6年6月)

『網走まで』（改造文庫2、志賀直哉全集第四巻、

昭和7年2月）

『志賀直哉読本』（読本現代日本文学10、三笠書房、

昭和11年10月）

(4) 寺杣「横光利一「蠅」の成立―新出異同の推移から―」（『研究紀要』第47巻1号、平成10年4月）

(5) 3の本文では、「笠のやうな太行松の上まで来ると、その笠の中へ沈んで了つた」とあつたところ。「笠のやうな」がないと後に来る「その笠」の対象がわからなくなる。

(6) 「真鶴」の場合は、4と5の本文は異同がないので、『映山紅』Aで最終稿に至つたと見られる。「雪の日」は、段落の通し番号1と語句の通し番号20に4と5の間の異同が見えるため、『映山紅』B所収本文が最終稿と考えられる。

(7) 現行全集の各巻の後記に凡例として、

本全集本文は、昭和五十八年（一九八三）年四月から翌年七月にかけて小社が刊行した第二次菊判全集（全一五巻。昭和三十（一九五五）年小社刊行の新書判全集を底本として作成）を底本とした。

とあり、現行全集の本文は、新書判全集を底本としている。また、「真鶴」と「雪の日」は、こ

の新書判全集の字句と九巻本全集の字句が一致している。

(8) 4の『映山紅』での文の異同は、「真鶴」に1箇所、「百舌」に6箇所、「山科の記憶」に1箇所の計8箇所あるが、このすべてが2文を1文にまとめる異同である。『映山紅』における文の修訂の大きな特徴となつている。

(9) 初出では「波の音と聞かうと思へば一寸の間それは波の音になる」とあるところである。「彼」が実際に聞いているのは波の音であるが、それが法界節や月琴の音に聞こえて仕方ないという状況である。「波の音と」だと、逆に実際に聞いているのは法界節や月琴の音で、それを「波の音と」して聞くことになりかねない。4の『映山紅』Aにおいて「波の音を」と修正したものと考えられる。しかし、伝えられるべき修訂が後続の本文にいつさい伝えられていない。

(10) 初出以来、標題は「城の崎にて」であつたが、本文では、「城崎温泉へ出掛けた」としていて整合性を欠いていた。『映山紅』で標題を改めたのは、両者を一致させるためであつたと考えられる。

- たらそま・まさと
— あだち・ともみ
— くまぶち・さや
— しんたく・あや
— みなみほり・あき
- 尾道大学日本文学科教授—
日本文学科三年生—
日本文学科三年生—
日本文学科三年生—
日本文学科三年生—